



# 日本植物分類学会 ニュースレター

No. 60

Feb. 2016

## 今号のトピックス

今号は盛りだくさんで、学会賞等の報告のほか、大会公開シンポ（3/6 富山大学）、野外研修会（5/20-22 佐渡島）、東アジア国際植物分類学シンポ（8/23-25 東京大学）のご案内があります。お見逃しなく！

## 目 次

### 諸報告

2016 年度第 15 回日本植物分類学会賞（学会賞・奨励賞） 受賞者の決定 .....	2
2016 年度第 10 回日本植物分類学会論文賞の決定 .....	3
「植物分類学の将来の発展と普及に関する委員会」の立ち上げ .....	4
2015 年度野外研修会（島根県隠岐諸島）の報告 .....	5
2015 年度野外研修会に参加して .....	7
2015 年度日本植物分類学会講演会の報告 .....	8
2015 年度日本植物分類学会講演会に参加して .....	9
2015 年度第 2 回メール評議員会議事抄録 .....	11

### お知らせ

日本植物分類学会第 15 回大会公開シンポジウムのご案内 .....	12
評議員会開催のお知らせ .....	12
2016 年度総会のお知らせと審議事項 .....	13
2016 年度日本植物分類学会野外研修会のお知らせ .....	17
東アジア国際植物分類学シンポジウム 2016 のご案内 .....	19
会員消息 .....	19

## 諸報告

### 2016 年度第 15 回日本植物分類学会賞（学会賞・奨励賞）受賞者の決定

学会賞選考委員会委員長 秋山 弘之

学会賞選考委員会において、ご本人や推薦人から提出いただいた研究概要と業績リストなどの資料をもとに協議いたしました。その結果、下記のように学会賞と奨励賞をそれぞれお二人の方に授与することとなりましたので報告します。

#### 学会賞

柏谷 博之氏（国立科学博物館 名誉研究員）

「地衣類の分類学的研究に対する貢献」

古池 博氏（特定非営利活動法人石川県自然史センター 理事長）

「石川県を中心とした植生・植物相研究を通じた分類学への貢献」

#### 奨励賞

片桐 知之氏（広島大学大学院理学研究科 助教）

「東アジア産苔類を中心としたコケ植物の多様性と系統関係の解明」

佐藤 博俊氏（京都大学生態学研究センター 研究員）

「DNA 情報を活用した外生菌根菌種の実態および共生樹種との関係の解明」  
(それぞれ 50 音順)

なお、授賞理由は以下の通りです。

#### 学会賞：

柏谷氏は、地衣類分類学を専門とされ、これまでに約 180 報の研究論文を発表されてきました。日本はもとより、韓国、中国、カンボジアなどのアジア地域や、ハワイ諸島、中南米、南極地域の地衣類相の解明に取り組まれてきただけでなく、ムカデゴケ科、カラタチゴケ科、モジゴケ科、サネゴケ科などで多くの新種および新知見を発表され、植物分類学に多大な貢献をされてきました。また、環境省「絶滅のおそれのある野生生物種の選定・評価検討会 植物Ⅱ分科会」では座長を務められ、環境保全の基礎資料となる、地衣類、蘚苔類、藻類、菌類の絶滅危惧種の選定について取りまとめをされました。一方、アンコールワット遺跡や国内の文化財石材に着生する地衣類の影響調査や、地衣類を除去する薬剤「コレトール」の民間企業との開発、地衣類の試験管培養など、ユニークな研究も行われ、分類学の枠にとられない幅広い研究活動を通じて社会への貢献もされてきました。本学会では庶務幹事ならびに絶滅危惧植物・移入植物専門第二委員会委員長を務められ、本会の発展にもご尽力されました。

古池氏は、石川県を中心とした植生調査に長く携わって来られました。これらの調査を通じて、「植生を植物社会学的・群落生態学的に観察・解析する」という姿勢を貫いておられます。個々の植物を分類し植生を明らかにするだけでなく、地域の植生が持つ適応的な意味を深く考察する点で、古池氏の研究姿勢は際立っています。また、「植物に精通した高校教諭」という立場を最大限に生かし、植物分類学の普及に貢献して来られた点も特筆に値します。さらに、古池氏は自然史博物館の設立に向け 1986 年から精力的に行政への働きかけを行って来られました。2005 年には特定非営利活動法人石川県自然史センターを立ち上げ、同センターが指定管理団体となり、2006 年に石川県立自然史資料館が開館しました。現在も同センターの理事長として、資料館の運営に携わっておられます。このように、地域の植生研究に大きく貢献されただけでなく、草の根的な普及活動から自然史資料館の設立まで、北陸地域におけ

る植物分類学の発展に尽力されてきました。

このように、お二人は植物分類学および日本植物分類学会の発展に特に顕著な貢献があったと認められましたので、その功績を称え、日本植物分類学会賞を授与することといたしました。

奨励賞：

片桐知之氏は、コケ植物（主に苔類）の分類学的・系統学的研究を行っておられます。苔類のなかでも形態的多様性に富むムクムクゴケ科について、各種の実態と系統関係を明らかにすることを世界規模で展開されています。その成果については学位論文を含む一連の論文として着実に発表されています。また日本産苔類のチェックリストの改定にも主著者として貢献しておられ、今後の苔類分類学を担う活躍が期待されています。さらにコケ植物の化石を対象とした分類学的研究にも取り組んでおられ、世界初となるヤバネゴケ科の化石種の発見・記載や日本最古（三畳紀）のコケ植物の分類学的位置の解明などの成果をあげておられます。これまでに論文1編をAPGに、大会において口頭発表2件、ポスター発表1件があり、レッドリスト第3次見直し現地調査（平成22年度蘚苔類）においても貢献されています。

佐藤博俊氏は、従来の形態情報に加えてDNAの塩基配列情報も最大限に活用し、生物学的実体を反映したキノコ類の生物学的種分類を特にオニイグチ属を中心として研究しておられます。さらに、キノコ類では1つの形態種に多数の隠蔽種が含まれていることによって、本来、外生菌根菌には宿主特異性をもつものが少なくないにも関わらず宿主特異性が存在しないと誤解されてきたのではないかという仮説を立てて研究を進め、大きな研究成果をあげている点は高く評価されるところです。さらに近年は、様々な専門分野の研究者と共同して独創的な研究を次々と行っておられます。大会では口頭発表4件、ポスター発表3件を行うとともに、分類学会講演会において「DNA情報を活用することで明らかになった外生菌根菌の種の実態と共生樹種との関係」として講演されています。

このように、お二人は優れた研究業績をあげた将来有望な若手研究者であり、その功績を高く評価し、日本植物分類学会奨励賞を授与することといたしました。

## 2016年度第10回日本植物分類学会論文賞の決定

論文賞選考委員会委員長 田村 実

2016年度第10回日本植物分類学会論文賞は、2015年に出版された英文誌『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』66巻および和文誌『分類』15巻に掲載された論文のうち、編集委員および論文賞選考委員から推薦された論文6編を論文賞選考委員会において審査し、次の2論文に決定しました。

Koi, S. & M. Kato. 2015. The taxonomy of Podostemaceae subfamily Tristichoideae in Laos, with descriptions of seven new species. *Acta Phytotax. Geobot.* 66 (2): 61–79.

選考理由：ラオス産カワゴケソウ科 Tristichoideae の分類学の論文で、7新種の記載を含み、検索表もわかりやすく、図表も的確で、ラオスとタイがアジアにおける Tristichoideae の多様性の中心であることを示している。カワゴケソウ科の分類学ならびにラオスのフロラの解明に大きく貢献しており、高く評価できる。

Tagane, S., H. Toyama, P. Chhang, H. Nagamasu & T. Yahara. 2015. Flora of Bokor National Park, Cambodia I: Thirteen new species and one change in status. *Acta Phytotax. Geobot.* 66 (2): 95–135.

選考理由：カンボジアのボコー国立公園における3年間のフロラ調査の成果の一部であるが、その間採集した約3100点の標本に基づき、DNAバーコーディングの手法も併用して、13の新種を見出し、記載している。カンボジアのフロラの解明に大きく貢献しており、高く評価できる。

## 「植物分類学の将来の発展と普及に関する委員会」の立ち上げ

会長 角野 康郎

日本の植物分類学研究を支える大きな力になってきた在野の研究者や愛好家（ノンプロフェッショナル、アマチュア）の高齢化が全国的に進み、世代交代が進んでいないことから、学会として将来に向けた対応が必要なのではないかという問題提起を受けて、「普及・啓発委員会（仮称）」を設置することが懸案になっていました。昨年の評議会と総会でこの件を承認いただきましたが、私の怠慢で具体的な立ち上げが遅れていました。この度、名称を標記のように改め、活動を開始することになりましたので報告します。

この間に学会として『新しい植物分類学 I, II』を出版するなど、植物分類学の面白さや課題を伝える努力はしてきました。この出版物は植物分類学の研究の最前線を紹介した好著としての評価を受けましたが、上記の問題の解決には至っていません。そこで、私としては、日本の植物分類学研究の裾野を支える存在である在野の方々の抱える問題点を具体的に把握して、少しでも支える力になれないか、そして、地域の自然史研究を支える博物館・植物園等の現状と課題を把握し、分類学研究の地域拠点として活性化する手立てはないか、という2点に問題をしぼり、まずは調査と検討を始めたい考えです。

今までも指摘されてきた問題ではありますが、具体的なデータで現状を把握する試みはありませんでした。そこで、まずはアンケートやヒアリングによって実情と課題を明らかにしたいと考えています。その上で、これからどういう取り組みが必要なのか、問題を提起することを目指します。当初、ワーキンググループとして提案しましたが、委員会としての位置づけを与えるのがよいという評議員会の意見を踏まえ、正式名称を標記のように改めました。私の会長任期の間に一定の結果を出すべく作業を進めたいと考えています。地域や立場を考慮して、次の皆さんに委員をお引き受けいただきました。作業の過程では会員の皆さまのご協力を仰ぐこととなりますが、その節は宜しくお願い致します。

委員会メンバー（北から）：持田 誠（浦幌町立博物館）、鈴木 まほろ（岩手県立博物館）、黒沢 高秀（福島大学）、志賀 隆（新潟大学）、海老原 淳（科博）、池田 博（東京大学）、藤井 伸二（人間環境大学）、瀬戸口 浩彰（京都大学）、東 浩司（京都大学）、佐久間 大輔（大阪市立自然史博物館）、角野 康郎（委員長、神戸大学）、高野 温子（兵庫県立人と自然の博物館）、狩山 俊悟（倉敷市立自然史博物館）、藤川 和美（高知県立牧野植物園）、上赤 博文（佐賀自然史研究会）、高宮 正之（熊本大学）

<資料> 昨年の評議員会で承認いただいた文書です。

### 「植物分類学の将来の発展と普及に関するワーキンググループ」の設置

日本の植物分類学の発展には、職業研究者だけではなく、大学等の研究機関に所属しない在野の研究者や植物愛好家（ノンプロフェッショナル、アマチュア）が重要な役割を果たしてきた。日本のフローラ解明への貢献はもちろんのこと、植物分類学会が中心になって進めたレッドリスト作成のための精度の高いデータの集積も、在野の研究者の協力によって可能となった。しかし、植物分類学研究の裾野を支えてきた在野の研究者、愛好家の高齢化と後継者不足は深刻である。生物多様性科学の基礎を支える重要な分野である植物分類学の将来の発展のためには、若手研究者の養成と研究職ポストの確保とともに、在野の研究者・愛好家の世代交代の支援と人的ネットワークの充実が重要な課題である。

各地域の自然史研究を支える拠点施設となるべき自然系博物館等の整備も不十分である。少人数のスタッフで広い範囲の職務をカバーしなければならず、十分に職責を果たすことが困難な状況もある。博物館等のネットワーク化は一部の地域で進みつつあるが、十分なハード整備が期待できない社会状況の中、さらに広範囲に、かつ有効に機能する支援のあり方が模索されてよい。

これらの問題は今までもしばしば指摘されてきたが、学会としては特段の対応をとってこなかった。しかし、これは日本の植物分類学の将来にとって放置できない課題である。そこで、これらの問題を取り

上げて調査を進めるとともに、将来の方策について検討することをミッションとした標記のワーキンググループ (WG) を設置したい。

WG は時限付きとし、以下の二つの作業を進める。

(1) 各都道府県の植物研究会等の活動、ならびに各地域で活動する在野の研究者・愛好家の現状を把握する

(2) 全国の博物館等施設の植物担当者の現状を把握し、拠点施設の課題を整理する

このような取り組みは学会活動の範囲を越えるという意見があるかもしれない。しかし、植物分類学会の存続基盤の強化を図るために、各地の植物研究会等との連携、情報交換、情報共有の仕組みをつくるだけでも意味はある。また在野の研究者にとっても、学会のこのような取り組みは大きな支えになるだろう。

## 2015 年度野外研修会（島根県隠岐諸島）の報告

山住 一郎

2015 年度の日本植物分類学会野外研修会は、10月9日（金）から11日（日）にかけて、2泊3日の日程で島根県の隠岐諸島で開催された。研修会の実施にあたっては、島根大学生物資源科学部の林蘇娟先生にお世話になり、現地でのご案内・ご指導をいただいた。

10月9日（金）

松江市美保関町七類港 15:45 発の高速船レインボージェットに乗り、約1時間で隠岐郡隠岐の島町（島後）の西郷港に到着。同じ船に乗り合わせた参加者の方々とタクシー乗り場で顔を合わせる。タクシーに分乗し、今回の研修会でお世話になる島根大学隠岐臨海実験所に向かう。約15分で実験所に到着。早く来られた方々はすでに実験所周辺の植物観察をされ、その話題で盛り上がっている。

18:30 から食堂で夕食。メニューはカレーライスと野菜サラダ。スタッフの方の手作りで、大変美味しくいただいた。

夕食後、実習室でミーティングが行われた。まず林先生から「隠岐諸島の植物多様性」というテーマで話をうかがった。隠岐諸島の成り立ちと地理・観光・経済、隠岐の植物に関する研究史、隠岐の植物多様性、隠岐の固有種などについて紹介があった。隠岐は大陸系・北方系・南方系の植物などが良好な自然環境の中で維持されているが、現在確認されている隠岐のラン科植物25種のうち17種が絶滅危惧植物であるというご説明があった。またトウテイランなどは、隠岐の有用植物資源として、その評価と活用について検討されているとのことであった。続いて生物資源科学部の中井崇善さんから、「絶滅危惧種オニヒョウタンボクの起源を探る」というテーマで、調査・研究内容と今後の課題について紹介があった。

10月10日（土）

2日目は2台のレンタカーと臨海実験所の車に分乗し、8:30に出発の予定。車を待っている間に、玄関前に植えられているトウテイランがカメラの格好の被写体となる。昨日の林先生のお話のとおり、地域の植物資源として大変有用な素材で、美しい花を咲かせている。

まず最初の観察地、隠岐の島町那久の壇鏡の滝へ向かう。約40分で壇鏡神社の駐車場に到着。車を降りると、参道入口の鳥居の前にそびえる2本のスギの大木が目飛び込んでくる。壇鏡の滝は「名水百選」に選ばれた滝である。出発前に日本名水百選「壇鏡の滝」と刻まれた碑の前で記念写真を撮る。

鳥居をくぐり参道を行くと、オシダ、サカゲイノデ、リュウメンシダ、ジュウモンジシダ、ハクモウイノデ、ヤマイヌワラビ、カラクサイヌワラビ、ベニシダ、トウゴクシダ、ミヤマイタチシダなどのシダ類が続く。壇鏡の滝から流れてくる川の石積みにはコタニワタリが見られる。対岸の斜面にはオシダ・サカゲイノデの群落が広がっている。この付近の標高は約280m。島後では海岸近くのスギの植林地にオシダやサカゲイノデなどの温帯性のシダが見られる。また標高の低いところにミズナラやコハウチワカエデ、カツラなどの

樹木が見られるのも特徴的である。さらに参道を進むとアケボノシュスランが開花していた。タマバシロヨメナも花を咲かせているが、舌状花が薄紫色を帯びる株が見られた。たくさん頭花をつけたアザミはオオバアザミと思われる。トチバニンジン、コチャルメルソウ、トキワイカリソウ、ミヤマカタバミ、スマレサイシン、フタリスズカなどを観察する。

神橋を渡り境内の鳥居をくぐって階段を上ると社殿が見え、まず左に落差約40mの雌滝が現れる。さらに進むと落差約50mの雄大な雄滝が現れる。社殿の横を通り、岩場に咲くダイヤモンドソウ、アケボノソウを見ながら狭い石段を上ると壇鏡の滝（雄滝）の真下に出る。岩壁はオーバーハングしており、滝を裏側から見る事ができる。裏見の滝である。傍に岩を抱くようにしてクロベ（ネズコ）が生えている。亜高山性の樹木クロベにこんな所でお目にかかるとは思わなかった。岩場には、ゲジゲジシダ、オニヤブソテツなどが見られた。植物を観察しながら来た道を駐車場まで引き返した。出発まで少し時間があるので周辺の植物を観察した。オキシヤクナゲ（植栽）、ウリノキ、サワダツ、ゴマギ、ヒメコウゾ、ヤマグワ、ツルアジサイ、ナガバヤブマオ、ボタンヅル、イノデ、フナコシイノデ（イノデ×サカゲイノデ）などが観察された。

壇鏡の滝を出発し大満寺山へ向かう。途中、銚子ダムのダムサイトで昼食を摂る。ダム湖の遠くに見える島後の山並みが美しい。

13:40に大満寺山登山口（標高445m）に到着する。隠岐の最高峰大満寺山は標高607.7m。案内板によると0.6km、尾根筋を行く30分のコースである。

登り始めてすぐに、開花中のアケボノシュスラン、ミヤマウスラ、赤い実をつけたユキザサに出会う。ミズナラ、ヤマトアオダモ、コハウチワカエデ、エンコウカエデ、クロモジ、ヤブツバキ、ツルシキミ、カントウマユミ、モミジイチゴ、チャボガヤなどの樹木、センボンヤリ、ヤブレガサ、オオバショウマ、スマレサイシン、ツルリンドウ、イガホオズキ、クルマムグラ、ウスバサイシン、サイハイラン、ベニシュスランなどの草本、オシダ、キヨタキシダ、ミヤマイトチシダ、サカゲイノデ、コタニワタリ、ホソバシケシダ、オオハナワラビなどのシダが観察された。オニヒョウタンボクも現れた。昨日画像を見せていただいていたので、すぐにそれと分かった。山頂が近づくと着生シダが見られるようになる。樹木にはオシャグジデング、イワオモダカ、ヒメノキシノブなどが着生し、苔むした岩にはカラクサシダが見られる。



大満寺山のオシャグジデング

やがて頂上に到着する。眺望が開け、眼下に西郷港・隠岐空港が見渡せる。頂上付近では、ムシカリ、ダイセンミツバツツジ、サワフタギ、トケンラン、タマバシロヨメナなどが見られた。

下山は乳房杉へのルートをとる。ハリギリ、サワグルミ、シキミなどを観察しながら急坂を降りると、オシダやリョウメンシダの群落が見れる。登山口に到着し、天然記念物の岩倉の乳房杉を観察する。推定樹齢800年のウラスギ（アシウスギ）で、地上数mのところから何本もの幹に分かれている。その周辺には見事なオシダの群落が広がっている。

17:00頃に車に戻り、林道を西郷方面に下る。帰路、樹々の間から、夕日を受けた大満寺山が見え隠れする。とても充実した1日であった。

途中で大型ショッピングセンターに寄り、夕食のバーベキューの食材を購入する。臨海実験所に到着後、みんなで協力をして火をおこし、大変美味しくいただいた。



乳房杉とオシダの群落

10月11日（日）

3日目は早朝に低気圧が通過し、雨と雷の音で目が覚める。幸い出発の時刻には雨が上がり、車で西

郷港に向かう。8:30 発のフェリー「しらしま」に乗船し、10:05 に島前の西ノ島町別府港に着く。ここからタクシーで焼火神社に向かう。林道沿いにはアブラギリがたくさん見られた。昔の栽培の名残であろうか。約 30 分で登り口に到着する。この頃には青空の広がる晴天となる。ツワブキの黄色の花が鮮やかである。

焼火神社への山道の両側はスダジイの優先する林で、ウラジロガシ、アカガシ、タブノキ、イヌガシ、ヤブニッケイ、クロモジ、イヌシデ、ケヤキ、エノキ、ノグルミ、リュウキュウハゼ、ヤブツバキ、イヌビワ、クマノミズキ、ナンゴクアオキ、ムラサキシキブなどが見られる。山道に沿って 2 倍体有性生殖種のハチジョウベニシダが続く。ベニシダ同様、極めて多型である。オオイタチシダにもいくつかのタイプが見られた。林縁にはヤブマオ、オオナルコユリ、ミヤマナルコユリ、サイハイラン、イノデ、オクマワラビ、アイノクマワラビ、オオホソバシケシダ、ウラボシノコギリシダ、オニヤブソテツなどがあった。

天然記念物「焼火神社地域植物群」と書かれた案内表示がある。この地域は学術的にも貴重な植物生育地である。苔むした岩場にはオキノアブラギク、シロウマアサツキ、トラノオシダ、チャセンシダなどが見られ、オニヒョウタンボクも観察された。さらに進むとヨコグラノキが現れた。社務所を過ぎると、スギの大木の背後に焼火神社の社殿が見えてくる。拝殿は岩壁の洞になったところに建てられており、岩場の上の方にはセッコクがたくさん着生している。開花を終えたトウテイランも観察された。岩場にはタクヒデンダも見られる。

ここで各自昼食を済ませ、ゆっくりと植物観察をしながら 14:30 に登り口に着く。タクシーで別府港に戻り、15:45 発のフェリー「おき」に乗船し、七類港に向かった。

隠岐での 3 日間はたくさんの植物に出会うことができ、大変充実した野外研修会であった。ご案内・ご指導をいただいた林先生、島根大学のスタッフの方々に、心よりお礼申し上げます。参加者は 13 名であった。



参加者集合写真

\*\*\*

貴重なタクヒデンダは、山住先生に道なき道をご案内いただき、ようやく見る事ができました。参加者同士で植物を尋ねあったり、また今回も大学附属施設ということで配膳や下膳などは皆で行ったり、参加者数人でレンタカーを運転したりと、ご参加されたみなさまのご協力によって、おかげさまで実り多い 3 日間を過ごすことができました。

常連のみなさまも、迷っておられる方も、どうぞお気軽に研修会にご参加ください。キャリアに関係なく、和気霽々とした雰囲気の中、植物の多彩な魅力を楽しむことができます。植物以外にもいろいろな話を聞くことができますし、なかなか普段は行けないところをゆっくりじっくり散策できます。今年度のご案内は 17 ページにあります。お申込をお待ちしております。(野外研修担当委員 西野貴子)

## 2015 年度野外研修会に参加して

中井 崇善 (島根大学)

島根大学生物資源科学部の 4 回生、中井です。林先生のご厚意で、今回初めて植物分類学会の野外研修会に参加しました。野外観察地となる隠岐諸島は卒研で何度か採集を行っている場所ではありましたが、これまで行くことができなかったサイトも観察地になっていたのも、とても楽しみにしていました。

1 日目は、林先生から隠岐諸島についての説明を受けた後、私から絶滅危惧種オニヒョウタンボクについての卒論研究を報告させていただき、参加されている方々から様々なご意見と有益な助言を頂くことができました。今後の研究に役立てたいと思います。

2日目は、午前中に壇鏡滝、銚子ダムで昼食を取った後、大満寺山へ行きました。天候も晴れており絶好の観察日和となりました。壇鏡滝は春に何度か採集を行っているサイトでしたが、10月の異なる景観と植物を見られて、とても新鮮でした。隠岐諸島の最高峰である大満寺山は初めて訪れるサイトで、皆さんと一緒に山頂まで登りました。ここでは、同行して頂いた支倉さん、飯田さんのご支援により、オニヒョウタンボクの複数個体を確認することができました。

3日目は朝早くに宿泊地を出て、フェリーに乗って西ノ島へ向かいました。西ノ島では焼火神社がある焼火山が観察地で、前日の大満寺山と比べると容易に登ることができました。初めての焼火山のフィールドで、歩きながら皆さんから様々な植物を教えていただきました。焼火神社付近で、参加された方から「オニヒョウタンボクあったね」と言われ、皆さんの観察眼に驚かされました。また、ここでは希少なタクヒデングの群生を観察することができ、感動しました。

参加された方々のそれぞれが専門とされている植物が異なるため、これまで意識していなかった植物の種類や特徴についても知ることができ、貴重な体験を得られて楽しかったです。またこのような機会があれば参加したいと思います。

\*\*\*

中井さんはレンタカーや食材買い出しのための道案内や、施設利用での細々とした手配など、自身の調査もしながら林先生をよくサポートされていて、参加者一同、非常にお世話になりました。林先生、大学施設のスタッフの皆様、そして中井さんにこの場を借りて心より御礼申し上げます。(野外研修会担当委員 西野貴子)

## 2015 年度日本植物分類学会講演会の報告

講演会担当委員 岡崎 純子

2015 年度の日本植物分類学会講演会が 2015 年 12 月 19 日（土）に大阪学院大学で開催されました。現在の植物分類学会が設立されてから 15 回目の講演会となります。今回は 109 名（学生 20 名）の参加者がありました。ご講演頂いた演者とその演題は以下の順でした。

瀬戸口 浩彰（京都大学大学院人間・環境学研究科）：地域社会と植物園と大学のネットワークで絶滅危惧種を守る試み

長谷川 匡弘（大阪市立自然史博物館）：ママコナ属でみる花形態の多様化と種分化

伊藤 元己（東京大学大学院総合文化研究科）：植物の生物多様性情報の収集と利用

加藤 真（京都大学大学院人間・環境学研究科）：昆虫における植物食の起源と多様な展開

梅林 正芳（金沢大学理工研究域自然システム学系）：『植物図』について

どの方にも幅広い内容の話のわかりやすく熱心にご講演いただきました。瀬戸口さんの地域との交流と植物園との連携による域外保全によるオオキンレイカ保護の取り組みの講演、長谷川さんによるママコナ属植物での花筒長変異を伴う種分化が訪花昆虫相の違いによって引き起こされた研究の講演、伊藤さんによる多様性情報の収集の重要性と世界レベルで集積された多様性データベース（GBIF）などに関する紹介やその活用についての講演や、加藤さんによる植食性昆虫と植物との相互作用とその進化についての紹介、梅林さんには植物絵と植物画の違い、植物画を描くにはその形態学的な知識や知見が重要であることをご自身の描かれた美しい植物画をもとに講演いただきました。



伊藤さんによる堀田先生の紹介



この講演会は、2015年夏日本植物分類学会およびその前身の植物分類地理学会を支えて下さった堀田満先生がお亡くなり、その哀悼の意を示し、堀田先生と学生時代から関連の深かった方々（伊藤さん、加藤さん、梅林さん）にお願いして、ご自分のご研究内容とあわせて堀田先生との思い出もお話いただきました。思いがけないことに、瀬戸口さんからは堀田先生と交流があったことや長谷川さんからは堀田先生が長く大阪市立自然史博物館友の会評議員であったことなどもお聞きすることができ、先生のお人柄を偲ぶことができました。

終了後に開催された懇親会には25名の参加者があり、演者を囲みアマチュアの研究者の方々も参加され、楽しく時をすごすことができました。お話を提供して下さった演者の5名の方々、また参加者の皆さま、会場をお世話下さっている大阪学院大の林一彦先生に感謝いたします。



瀬戸口さんによる堀田先生著書の堀田先生自身が描かれた表紙絵の紹介



懇親会での記念写真

## 2015年度日本植物分類学会講演会に参加して

小原 昌之 (大阪教育大学大学院)・南 慎二郎・雪山 大樹・小山 はるか・西浦 心太郎 (大阪教育大学理科教育)

2015年度日本植物分類学会講演会が12月19日(土)に開催されました。今回講演くださった5名の方々は堀田先生とゆかりのある先生方で、堀田先生との思い出話を交えながらお話してくださいました。僕たちを含め植物分類における学術的な内容に関して初心者といってもよい学生や、一般の方々も参加するため、講演内容も専門的な内容から、一般向けの分かりやすい内容まで多岐にわたっての講演でした。

瀬戸口先生は地域社会と植物園と大学のネットワークで絶滅危惧種を守る試みについて講演して下さいました。年々増加する地球の平均気温の上昇や動物の食害、盗掘や工事などの影響により、現在日本では多くの種が絶滅の危機に瀕しているとのこと。この事実を食い止める方法のひとつに域外保全があるとおっしゃっていました。域外保全とは、生育地とは異なる安全な施設で生物を保護・育成することで、絶滅を防ぐ方法です。ところが一株でもどこかの施設に存在すれば、その絶滅危惧種が保有とみなされ、保有されている株の産地、分譲履歴、遺伝情報などは存在せず、その後の追跡調査も行われていないような例も多く存在しているという問題点を挙げられていました。この問題点を改善するために考案されたのがQRコードの活用法でした。植物一株一株にQRコードを作成し、その種の遺伝子や里親の情報等を記録し、域外保全のネットワークを構成することにより、植物の管理者の入れ替わり時における引き継ぎ漏れをなくし、里親による絶滅危惧種の流出のリスクを減らすことができる仕組みです。特に植物は専門性の低い施設でも育成・保全に取り組みやすく、自治体で管理したり、学校現場等で教材として扱ったりすることも可能です。QRコードシステムの構築が域外保全の増加に繋がるという可能性が紹介され、今後の絶滅危惧種の保全活動がより進歩していくのではないかと思える講演でした。

長谷川先生はマモコナ属で見る花形態の多様化と種分化について講演してくださいました。虫媒花の植物には系統樹のある段階でポリネーターが変わるポリネーターシフトという現象が起こることがあり、このような異なるポリネーターへの適応によって花形態は多様化していくとのこと。今回の研究では、

異なるポリネーターへの適応が進行する環境を明らかにするために、生育地によって変種が存在するママコナ属について調査を行っていました。ママコナ属は痩せた尾根や丘陵地に生育する一年生草本で、主なポリネーターはハナバチ類で、生育地によって花筒の長さが異なるものがあるそうです。紹介して下さったオオママコナは紀伊半島の南端のみに分布し、ママコナ属の他種と比べて花筒が非常に長くなっています。オオママコナと近縁な種であるシコクママコナは紀伊半島の各地に分布し、花筒は他種と同程度の長さだそうです。両種の開花期は9月から11月でほぼ重なっています。オオママコナ、シコクママコナの各生育地にてポリネーターの訪花頻度を調査したところ、シコクママコナのポリネーターはトラマルハナバチであったのに対し、オオママコナのポリネーターはホシホウジャクでした。また両種それぞれの生育地にて開花期の訪花昆虫相を調べたところ、オオママコナの生育地ではマルハナバチ類がみられなかったそうです。オオママコナの分布域では乾燥したウバメガシ林が主体で花資源が少なく、ハナバチ類が進出できていないと考えられるようです。そのためオオママコナの特異な花形態は、ハナバチ類が分布しない環境下でポリネーターを得るために、元々盗蜜者であった昆虫に適応して形態変化が起こったと考えられることが紹介されました。また屋久島には、花筒が非常に短いヤクシママコナが分布しているようです。調査を行ったところ、ヤクシママコナにはハナバチ類はほとんど訪花せず、蜜も分泌していないことが明らかになったようです。同じママコナ属でも多様な形態があり、それぞれにあわせた進化をとげていることが分かる講演でした。

伊藤先生は植物の生物多様性情報の収集と利用について講演してくださいました。初めにインターネットを用いた情報のやり取りについて紹介されました。世界規模の生物多様性データベース GBIF ネットワークでは6億5千万件の分布情報を集積しているが、シベリアやアフリカを除き、アジアは特に情報不足の地域というのが現状のようです。検索についてはJBIFのデータベースを用いると和名での検索が可能となるそうです。JBIFには現在300万件近くの情報が集積され、Google Earthとの連携で、緯度・経度の情報も得ることができるとも便利なもののようです。さらに絶滅危惧種など守らなければならない種については情報の精度を下げるなど、掲載する種によって工夫がされているとのことでした。情報の信頼性についてはユーザーの判断に委ねられるようですが、研究の初期段階の資料として用いることは有用であると述べていました。そういったサイトの利用方法についてもご教授くださり、これらの情報から土地利用の変化を調べることや、そのデータを用いた研究への利用が可能であるとのことでした。土地利用の変化がわかると、メッシュあたりの種の多様性がどのように変遷したかといった調査研究にも用いることができるようになるそうです。しかし問題点として、日本でもやはりまだまだ情報量が少ないということがあるようです。情報を提供してもそれが直接利益につながらないと考えられるためです。今では学術的功績として評価しようという動きもあり、情報を提供できるシステムづくりが進められているそうです。

加藤先生は植物と植食性昆虫との進化について講演してくださいました。植物食の起源は化石からも見ることができ、デボン期には既に存在していたようです。またジュラ紀の化石からは植物と植食性昆虫の特異的な進化も見られることも明らかとなっており、植物と植食性昆虫の攻防の起源はとても古いものでした。現在の地理的隔離によって確立された多様性や、昆虫と植物の関係性について多くの実例を写真を用いて紹介してくださいました。特に送粉共生のお話は大変興味深いお話でした。植物にある様々な送粉様式の中でも今回は、絶対送粉共生について多く知ることができました。送粉共生にはいろいろな形があり、植物や昆虫がお互いを利用し合っているようでした。授粉と同時に花に産卵し、種子を餌として幼虫が成長する昆虫の話では、昆虫は花に1つしか産卵せず、花に2つ3つ重複産卵した場合、植物はその花を落とすことで、幼虫が増えすぎないように、種子を食べ尽くされないようにしているようでした。これが昆虫が重複産卵をわざと避ける制裁機構として働き、植物と昆虫はうまく共生しているようです。他にも共生者が絶滅した話や3種共生の話など多岐にわたった送粉共生のお話をしてくださいました。送粉者はたくさんいればよいというだけでなく、共生関係と寄生関係の複雑さがよくわかる講演でした。

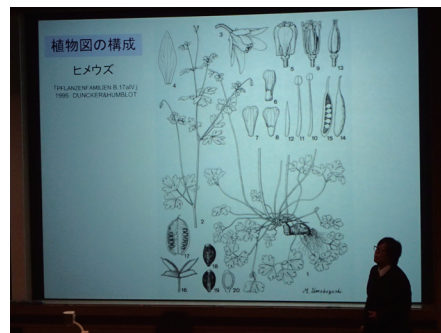
梅林先生は植物図について講演してくださいました。植物図とは植物の構造を説明するために用いられるものであり、絵画等の見た目の綺麗さや芸術性を求めるものとは違っていると説明してくださいました。その例として、コチョウランでは横から描くことによって葉形を説明できるようにし、ヤブツバキでは葉表面が濃緑、葉裏面を緑色にというように色を使い分けているようです。このようにその植物がどのような構造をしているのかをわかりやすく図で説明したものが植物図であるとのことでした。「見たままの姿を描

いたとしても説明したいものが見えていなければ意味がない。植物図を書くにはまずその植物を良く観察しなければならない。どの方向からスケッチをするべきかを考えてスケッチをする。そして花卉や雄しべなど様々なスケッチの下図をつくり、それらを目的に応じて組み合わせることで完成させる。」などの事柄が植物図には必要とのことでした。植物図の作成には植物の構造を知らなければならないので、相応の知識が必要であり、専門性も高いことがわかりました。そのため植物図はプロが書くと信頼性が高くなり、見栄えも良くなります。そして、ボタニカルイラストレーターになりたいという潜在的な希望者はそれなりにいると予想されるようです。しかし、フリーランスなどの選択肢もあるようですが、収入が安定しないので、職業としての確立が難しい現状にあるようです。教育の場で植物図の作成に取り組ませることは、学生の観察眼を養い植物を観察する力をつけさせることに繋がると考えられるようです。普段見る植物図にはこれだけの思いがあることを知り、図鑑を見るたびにその思いを感じることでできる講演でした。

今回の講演内容も様々な分野から構成されており、非常に多くのことを学ぶことができました。また、どの講演の先生方も一般の方々や僕たち学生のために、発表内容を分かりやすいように工夫してくださったのでとても聞きやすい講演でした。数多くの貴重なお話をして下さった先生方、分かりやすい発表をしていただきありがとうございました。



加藤先生のご講演の様子



梅林先生のご講演の様子と描かれた植物画の紹介

## 2015 年度第 2 回メール評議員会議事抄録

庶務幹事 志賀 隆

2015 年 12 月 14 日～ 2015 年 12 月 28 日に 2015 年度第 2 回メール評議員会が開催されましたので、議事抄録を報告します。この会議は事業計画案と会計予算案を評議員の方々に審議していただき、総会までの会務・会計執行の指針を得るためのものです。なお、本ニュースレターでお知らせする 3 月 5 日の評議員会と 7 日の総会に提案される議案には、その後の推移を反映した最低限の修正が加えられている箇所がありますことをご了承ください。

開催日時：2015 年 12 月 14 日～ 2015 年 12 月 28 日

開催方法：電子メール等の媒体を用いた会議

参加者：評議員全員

議長選出

慣例にしたがい角野康郎会長を議長とすることに反対はなかった。

審議事項

第 1 号議案 2015 年度事業報告案

第 2 号議案 2015 年度決算案

第 3 号議案 2016 年度事業計画案

第 4 号議案 2016 年度予算案

#### 審議結果

第 1 号議案, 第 3 号議案は承認多数で可決された。第 2 号議案は 2 回, 第 4 号議案は 1 回の修正を経た後, 承認多数で可決された。委任状はなかった。

第 1 号議案 【賛成 9 票, 反対 0 票, 白票 4 票】

第 2 号議案 【賛成 9 票, 反対 0 票, 白票 4 票】

第 3 号議案 【賛成 9 票, 反対 0 票, 白票 4 票】

第 4 号議案 【賛成 9 票, 反対 0 票, 白票 4 票】

議事録署名人として海老原淳氏と梶田忠氏が選出された。

## お知らせ

### 日本植物分類学会第 15 回大会公開シンポジウム

### 「富山県の植物自然史研究—どんな植物が発見され何がわかってきたか—」のご案内

第 15 回大会会長 中田 政司

富山で日本植物分類学会大会が開催されることに因み, 富山を舞台とした植物自然史研究に関する話題で公開シンポジウムを開催いたします。会員・非会員を問わず, 無料で聴講いただけますので, 関係者にご周知いただき, 多数ご参加いただきますようお願い申し上げます。事前の申し込みは不要です。

[日時] 2016 年 3 月 6 日 (日) 14 時 30 分～ 17 時

[場所] 富山大学五福キャンパス黒田講堂 (富山市五福 3190)

[参加費] 無料

[講演者と演題]

1. 佐藤 卓 (日本海植物研究所) 「富山で発見された植物」
2. 太田 道人 (富山市科学博物館) 「富山の自然環境要素と植物相」
3. 岩坪 美兼 (富山大学大学院理工学研究部) 「染色体から見えてきた富山の植物の多様性」
4. 大原 隆明 (富山県中央植物園) 「富山県植物誌改訂版編集委員会の活動から」

[オーガナイザー] 中田 政司

[お問い合わせ] 日本植物分類学会第 15 回大会準備委員会 中田政司

Tel : 076-466-4187 Fax : 076-465-5923 E-mail : bunrui@bgtym.org

### 評議員会開催のお知らせ

庶務幹事 志賀 隆

日本植物分類学会第 15 回大会 (於:富山大学) の開催に合わせ, 下記の通り評議員会を開催します。評議員, 幹事会等の関係各位のご出席をお願いいたします。

日時：2016年3月5日（土）16時～19時

会場：富山大学理学部2号館1階B136室（富山県富山市五福3190）

詳細は関係各位において連絡いたします。審議事項についてご意見やご希望がございましたら、評議員、会長、幹事、委員長のいずれかにお伝えください。

## 2016年度総会のお知らせと審議事項

庶務幹事 志賀 隆

3月7日に開催される総会において、以下の議案が審議されます。会員各位の参加をお願いします。

1. 2015年度事業報告案（13ページ参照）
2. 2015年度決算報告案（14ページ参照）
3. 2016年度事業計画案（16ページ参照）
4. 2016年度予算案（15ページ参照）

## 2015年度事業報告（案）

### (1) 集会等の開催

- ・学術集会、講演会、研修会
  - 年次学術集会（日本植物分類学会第14回大会：3月5～8日 福島大学）を開催した（ニュースレター No. 57 で報告）。
  - 2015年度講演会（12月19日、大阪学院大学）を開催した（ニュースレター本号で報告）。
  - 2015年度野外研修会（島根県隠岐諸島）を開催した（10月9日～11日）（ニュースレター本号で報告）。
- ・総会、評議員会
  - 年次総会を年次学術集会に合わせて開催した（3月7日）（ニュースレター No. 57 で報告）。
  - 評議員会を1回（ニュースレター No. 57 で報告）、メール評議員会を2回開催した（第1回をニュースレター No. 56 で報告、第2回を本号で報告）。

### (2) 出版物の刊行

- ・学会誌の発行
  - 英文誌『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』第66巻1～3号（計3冊）を発行した。
  - 和文誌『分類[日本植物分類学会誌]』第15巻1～2号（計2冊）を発行した。
- ・ニュースレター
  - 『日本植物分類学会ニュースレター』56～59号（計4冊）を発行した。

### (3) 委員会活動

- 以下の委員会を組織し、目的に沿って活動した。
- ・絶滅危惧植物専門第一委員会（藤井委員長）
  - ・絶滅危惧植物専門第二委員会（樋口委員長）
  - ・植物データベース専門委員会（伊藤委員長）
  - ・学会賞選考委員会（秋山委員長）
  - ・論文賞選考委員会（田村委員長）
  - ・大会発表賞選考委員会（永益委員長）

2015 年度  
決算報告(案)  
(2015.12.31 現在)

収入の部	単価	数	予算	決算	予算との差異
会費					
通常(一般)	5,000	740	3,700,000	4,374,720	△ 674,720
通常(学生/海外)	3,000	98	294,000	397,120	△ 103,120
団体会員	8,000	23	184,000	176,000	8,000
バックナンバー販売			100,000	213,114	△ 113,114
命名規約(ウィーン規約)販売			0	0	0
利息			1,000	2,579	△ 1,579
雑収入			50,000	138,274	△ 88,274
小計			4,329,000	5,301,807	△ 972,807

支出の部	単価	数	予算	決算	予算との差異
大会補助費			100,000	0	100,000 注1
講演会補助費			70,000	30,300	39,700
出版物印刷費					
APG vol.66(1,2,3)	720,000	3	2,160,000	2,570,345	△ 410,345 注2
分類vol.15(1,2)	750,000	2	1,500,000	1,460,592	39,408
ニュースレターNo.56-59	55,000	4	220,000	183,816	36,184
英文校閲費			50,000	50,000	0
出版物送料					
APG送料	80	3,000	240,000	218,297	21,703 注3
和文誌送料	80	2,000	160,000	98,209	61,791 注3
NL送料	60	4,000	240,000	369,939	△ 129,939 注4
会議費			50,000	39,000	11,000
学会表彰経費			60,000	64,972	△ 4,972
自然史学会連合負担金			20,000	20,000	0
分類学会連合負担金			10,000	10,000	0
事務局管理費					
消耗品費			50,000	41,790	8,210
交通費			100,000	4,500	95,500
アルバイト賃金			470,000	176,400	293,600 注5
封筒等印刷費			250,000	0	250,000 注6
通信費(小包手数料を含む)			70,000	41,946	28,054
手数料・その他			30,000	26,624	3,376
自動振替集金代行基本料			3,240	3,240	0
自動振替口座確認手数料	126	170	21,420	20,217	1,203
自動振替新規手数料			0	0	0
レンタルサーバー使用料			26,000	25,920	80
国際シンポジウム積立金			300,000	300,000	0
予備費			100,000	0	100,000
合計			6,300,660	5,756,107	544,553

単年度収支	△ 1,971,680	△ 454,300	△ 1,517,380
前年度からの繰越金	6,872,072	6,872,072	0
次年度への繰越金	4,900,412	6,417,772	△ 1,517,380

注1:大学の学術振興基金及び福島県コンベンション助成による補助を受けた

注2:ページ数の増加

注3:複数誌の同時発送により節約

注4:同時発送による送料の増加及び単価の増加

注5:編集作業補助のみとしたことで節約

注6:追加印刷の必要が無かった

特別会計  
2015 年度決算(案)

収入	予算	決算	予算との差異
前年度繰越金	2,555,641	2,555,641	0
国際シンポジウム積立金	300,000	300,000	0 注1
命名規約和訳販売	35,520	0	△ 35,520 注2
レッドデータブック原稿執筆業務	2,094,150	2,094,150	0 注3
寄付	0	0	0
利息	0	0	0
合計	4,985,311	4,949,791	35,520

支出	予算	決算	予算との差異
命名規約和訳出版	0	0	0
国際シンポジウム準備金	1,200,000	0	△ 1,200,000 注4
国際シンポジウム若手派遣	0	0	0
レッドデータブックの寄贈	2,094,150	1,862,114	△ 232,036 注5
次年度への繰越金	1,691,161	3,087,677	1,396,516
合計	4,985,311	4,949,791	35,520

注1:一般会計から移管。

注2:2015年の販売分は未販売

注3:レッドデータブック原稿執筆協力に対する自然環境研究センターから学会への謝礼

注4:シンポジウム開催をしなかったため未執行

注5:レッドデータブック執筆者および調査協力者に対する謹呈。予定数よりも少なかったため減額

## 2016 年度予算 (案)

収入の部	単価	数	予算	前年度予算との差異	
会費					
通常(一般)	5,000	733	3,665,000	△ 35,000	注1
通常(学生/海外)	3,000	94	282,000	△ 12,000	注1
団体会員	8,000	19	152,000	△ 32,000	注1
バックナンバー販売			100,000	0	
命名規約(ウィーン規約)販売			0	0	
利息			1,000	0	
雑収入			50,000	0	
合計			4,250,000	△ 79,000	

支出の部	単価	数	予算	前年度予算との差異	
大会補助費			100,000	0	
講演会補助費			70,000	0	
出版物印刷費					
APG vol.67(1,2,3)	750,000	3	2,250,000	90,000	注2
分類vol.16(1,2)	750,000	2	1,500,000	0	
ニュースレターNo.60-63	50,000	4	200,000	△ 20,000	注2
英文校閲費			50,000	0	
出版物送料					
APG送料	100	3,000	300,000	60,000	注3
和文誌送料	100	2,000	200,000	40,000	注3
NL送料	80	4,000	320,000	80,000	注3
会議費			80,000	30,000	注4
学会賞表彰経費			60,000	0	
自然史学会連合負担金			20,000	0	
分類学会連合負担金			10,000	0	
事務局管理費					
消耗品費			50,000	0	
交通費			150,000	50,000	注4
アルバイト賃金			200,000	△ 270,000	注5
封筒等印刷費			50,000	△ 200,000	注6
通信費(小包手数料を含む)			70,000	0	
手数料・その他			30,000	0	
自動振替集金代行基本料			3,240	0	
自動振替口座確認手数料	130	170	22,100	680	注7
レンタルサーバー使用料			26,000	0	
国際シンポジウム積立金			0	△ 300,000	注8
予備費			200,000	100,000	注9
合計			5,961,340	△ 339,320	

単年度収支	△ 1,711,340
前年度からの繰越金	6,417,772
次年度への繰越金	4,706,432

注1:会員数見直しによる(新入会, 名管会員増, 退会・除名・逝去など)

注2:過去5年の印刷費に基づき単価の見直し(12500円/頁×60頁/号)

注3:発送単価の見直し

注4:幹事引継会議のため増額

注5:通常の謝金は15万円に減額。CiNiiからJ-STAGEの移行確認のための謝金を5万円計上。

注6:追加印刷分

注7:手数料にかかる消費税の見直し

注8:2017年度以降の開催予定が未定のため、積立を行わない

注9:選挙のため増額

特別会計  
2016 年度予算 (案)

収入	予算	前年度予算との差異
前年度繰越金	3,087,677	532,036
国際シンポジウム積立金	0	△ 300,000
命名規約和訳販売	35,520	0
寄付	0	0
利息	0	0
合計	3,123,197	△ 1,862,114

支出	予算	前年度予算との差異
命名規約和訳出版	0	0
国際シンポジウム準備金	1,200,000	0
国際シンポジウム若手派遣	0	0
次年度への繰越金	1,923,197	232,036
合計	3,123,197	△ 1,862,594

注1:2017年度以降の開催予定が未定のため、積立を行わない

注2:出版社との契約(販売価格2368円/部×10%×150部=35520円に基づく)

注3:開催に係る準備金

注4:今年度は海外での開催が無いため

- ・ ABS 問題対応委員会（村上委員長）
- ・ 国際シンポジウム準備委員会（池田委員長）
- ・ 植物分類学の将来の発展と普及に関する委員会（角野委員長）

#### (4) 表彰

- ・ 日本植物分類学会賞（学会賞・奨励賞）の授与を行った（ニュースレター No. 56 で報告）。
- ・ 日本植物分類学会論文賞の授与を行った（ニュースレター No. 56 で報告）。
- ・ 日本植物分類学会大会発表賞の授与を行った（ニュースレター No. 57 で報告）。

#### (5) 国内外の関係学術団体との連携・協力

- ・ 国内学会連合等への参加・連携を行った：日本学術会議，自然史学会連合，日本分類学会連合など。
- ・ 国際シンポジウム開催の準備を進めた。

#### (6) その他

- ・ 学会刊行物のバックナンバー等の販売と整理を行った。
- ・ 植物分類学関連情報（学術集会，研究動向，出版物，公募）を収集し，ニュースレター，ホームページ等で提供した。
- ・ 学会刊行物の国内外の研究機関への寄贈と交換を行った。
- ・ 植物分類学研究マニュアルの作成と和文誌『分類』への原稿掲載（第 15 巻 1 号）を進めた。

### 2015 年度決算報告（案） → 14 ページに掲載

### 2016 年度事業計画（案）

#### (1) 集会等の開催

- ・ 学術集会，講演会，研修会
  - 年次学術集会（日本植物分類学会第 15 回大会：3 月 5 ～ 8 日，富山大学）を開催する。
  - 2016 年度講演会を開催する（12 月中旬，大阪学院大学）。
  - 2016 年度野外研修会を開催する（5 月 20 日～ 22 日，新潟県佐渡市）。
  - 国際シンポジウムを開催する（8 月 23 ～ 25 日，東京大学）。
- ・ 総会，評議員会
  - 年次総会を年次学術集会に合わせて開催する（3 月 7 日）。
  - 評議員会を開催する（3 月 5 日）。

#### (2) 出版物の刊行

- ・ 学会誌の発行
  - 英文誌『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』第 67 巻 1 ～ 3 号（計 3 冊）を発行する。
  - 和文誌『分類 [日本植物分類学会誌]』第 16 巻 1 ～ 2 号（計 2 冊）を発行する。
- ・ ニュースレター
  - 『日本植物分類学会ニュースレター』60 ～ 63 号（計 4 冊）を発行する。

#### (3) 委員会活動

- 以下の委員会を組織し，目的に沿って活動する。
- ・ 絶滅危惧植物専門第一委員会
- ・ 絶滅危惧植物専門第二委員会
- ・ 植物データベース専門委員会
- ・ 学会賞選考委員会



- ・論文賞選考委員会
- ・大会発表賞選考委員会
- ・ABS 問題対応委員会
- ・国際シンポジウム準備委員会
- ・植物分類学の将来の発展と普及に関する委員会

#### (4) 表彰

- ・日本植物分類学会賞（学会賞・奨励賞）の授与を行う。
- ・日本植物分類学会論文賞の授与を行う。
- ・日本植物分類学会大会発表賞の授与を行う。

#### (5) 国内外の関係学術団体との連携・協力

- ・国内学会連合等への参加・連携を行う：日本学術会議、自然史学会連合、日本分類学会連合など。
- ・The Korean Society of Plant Taxonomists (KSPT), および Taxonomy and Evolution Division, the Botanical Society of China (BSC) 等と連携する。

#### (6) その他

- ・学会刊行物のバックナンバー等の販売と整理を行う。
- ・植物分類学関連情報（学術集会、研究動向、出版物、公募）を収集し、ニュースレター、ホームページ等で提供する。
- ・学会刊行物の国内外の研究機関への寄贈と交換を行う。
- ・植物分類学研究マニュアルの作成と和文誌『分類』への原稿掲載ならびに『植物分類学研究マニュアル』（仮題）の出版計画を進める。
- ・会長・評議員の選挙を行う。

**2016 年度予算（案）** → 15 ページに掲載

## 2016 年度日本植物分類学会野外研修会のお知らせ

崎尾 均, 阿部 晴恵, 菅 尚子（新潟大学農学部附属フィールド科学教育研究センター佐渡ステーション）

佐渡島は新潟県北部に位置し、周囲約 263km、面積は沖縄本島に次ぐ大きさの島です。中央の国仲平野を挟んで、北側には約 1000m の山が連なる大佐渡山地、南側には緩やかな丘陵地帯の小佐渡丘陵が広がっています。近年では、トキや佐渡金山などで有名ですが、春から秋にかけて様々な種類の花を堪能することができる、花の島としても知られています。本研修会を開催する 5 月中旬は、オオミスミウやシラネアオイなどの春植物などが見頃を迎えています。

### 「花の島・佐渡」研修会の内容と日程予定

日程：2016 年 5 月 20 日（金）～ 22 日（日）

第 1 日目（5 月 20 日）：両津港に 13 時に集合し、ドンデン高原へ移動。ドンデン高原の頂上付近を 1～2 時間トレッキングしながら植物を観察する。ドンデン高原は、かつて牛の放牧が盛んに行われており、半自然草原が広がっている。また、高山植物であるハクサンシャクナゲなども観察することができる。天候が良ければ、頂上付近からは佐渡の国仲平野が一望できる。その後、トビシマカンゾウが群生する大野亀を經由し、宿泊する佐渡ステーションへ移動する。夕食後、崎尾教授による、佐渡島の自然についての講義を行う予定（19:00～20:00）。

第2日目(5月21日):佐渡ステーションを出発(8:30)、公用車で演習林へ移動。終日、演習林で植生観察を行う。佐渡演習林は、大佐渡山地北部の稜線沿い西側斜面に広がっている。佐渡島でも有数の高い自然度を備えた場所であり、森林だけでなく半自然草原や風衝地など様々な生態系が存在する。演習林内は公用車で移動し、いくつかのポイントで植生観察を行う。スギ天然林では、1~2時間程度のトレッキングをしながら植物を観察する。夜は海産物も楽しみながらの懇親会。

第3日目(5月22日):佐渡ステーションを出発(8:30)、トキの森公園を見学、または海岸植生の観察を行い、両津港で解散(12:00)。

※第2日目の夜に佐渡ゼミがあり、ご参加自由です。佐渡ゼミについては、佐渡ステーションのホームページをご覧ください。

※天候により、内容を変更する場合があります。あらかじめご了承ください。

※佐渡ステーションの周囲には、スーパー等の小売店はありません(飲料自動販売機のみあります)。

※佐渡ステーション(宿泊施設)の詳細は、ホームページをご覧ください。

[http://www.agr.niigata-u.ac.jp/fc/sado\\_html/sado\\_index.html](http://www.agr.niigata-u.ac.jp/fc/sado_html/sado_index.html)

**申込方法:**以下の申込先まで氏名、性別、連絡先住所、電話番号、メールアドレスの記入をお願いします(施設利用の都合により、参加申込を野外研修担当委員でとりまとめます)。また心臓疾患・喘息・アレルギー(ハチ・食物)などの疾患がある方は必ず事前にお知らせ下さい。

**申込期限:**4月15日までを目処として、申込順に20名程度で締め切らせて頂く予定です。宿泊施設の定員の関係ですのでご了承ください。

**交通:**集合、解散場所は両津港になります。両津港までは、新潟港よりカーフェリーまたはジェットfoil(佐渡汽船)を利用できます。または、直江津港より小木港まで高速カーフェリー(佐渡汽船)を利用し、小木港から両津港までは島内の路線バスまたはタクシーを利用できます。佐渡汽船の乗船料金、時刻表や島内の路線バスについては、下記のサイトをご参照ください。

※佐渡汽船 <http://www.sadokisen.co.jp/>

※新潟交通佐渡 <http://www.sado-bus.com/>

**参加費:**7,000円(宿泊費、食費、懇親会、リネン費含む)

※参加費は当日に集金させていただきます。

※佐渡汽船両津港までの往復交通費は別途各自でご負担ください。

#### 申込先:

野外研修担当委員 西野 貴子

〒599-8531 堺市中区学園町1-1 大阪府立大学大学院 理学系研究科

電子メール: [nishino@b.s.osakafu-u.ac.jp](mailto:nishino@b.s.osakafu-u.ac.jp)

電話:072-254-9754

ファックス:072-254-9932

※できるだけ、メールやファックスでご連絡いただきますようお願いいたします。メール件名に「野外研修会」と入れていただくとわかりやすく助かります。

※ご連絡されてから5日以内に確認の連絡がない場合には、恐れ入りますが再度、ご連絡いただきますようお願いいたします。

次号に紹介予定の「しだとこけ談話会」からお知らせです。

4月10日13時から、大阪市立自然史博物館にて、「184回しだとこけ談話会」を「北川先生追悼会」として開催予定です。瀬戸剛さん、岩槻邦男さん、加藤雅啓さん、長谷川二郎さん、秋山弘之さんなど、同会関係者が揃う予定です。詳細が決まりましたら以下のHPに掲載予定です。<http://homepage2.nifty.com/fern/danwakai/#m03>

## 東アジア国際植物分類学シンポジウム 2016 のご案内

国際シンポジウム準備委員長 池田 博

植物分類学に関する国際シンポジウムを、今年の夏に開催いたします。

[日程] 2016年8月23日(火)～8月25日(木)

8月23日(火)・24日(水) シンポジウム(口頭発表・ポスター発表)

8月25日(木) エクスカーション

[会場] 東京大学弥生講堂 一条ホール

〒113-8657 東京都文京区弥生 1-1-1 東京大学農学部内

しばらく中断していた国際植物分類学シンポジウム(日中韓3国シンポジウム)を、今年度は日本で開催します。会期を3日とし、2日をシンポジウム(口頭発表・ポスター発表)、1日をエクスカーションに当てます。

詳しい日程、参加申込、発表の要領・要旨の書式等につきましては、固まり次第、逐次ご連絡いたします。会員の皆様におかれましては、8月の第4週の予定を空けていただき、ふるってご参加いただきますよう、お願い申し上げます。特に若手の研究者の皆様には、このシンポジウムでの発表は国際学会での発表と位置づけられますので、積極的に参加・発表していただきますよう、お願いいたします。

[お問い合わせ先]

〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1

東京大学総合研究博物館 池田 博

Tel./Fax. 03-5841-2839 E-mail: h\_ikeda@um.u-tokyo.ac.jp

編集室より

植物研究会・同好会紹介の記事を募集したところ、複数の方から紹介記事をいただきました。ありがとうございました。残念ながら今号は掲載できなかったのですが、次号以降に掲載していきます。引き続き原稿も募集します。活発な活動紹介をお待ちしています!

ニュースレター担当幹事 堤 千絵 (tsutsumi@kahaku.go.jp)

